

群 教 セ	G08 - 05
	平 26. 254 集
	農業 - 高

学校設定科目「ガーデンデザイン」における 自他の考えをまとめ表現する力を高める指導 の工夫 —アクティブ・ラーニング型授業実践を通して—

特別研修員 柳沢 華織

I 研究テーマ設定の理由

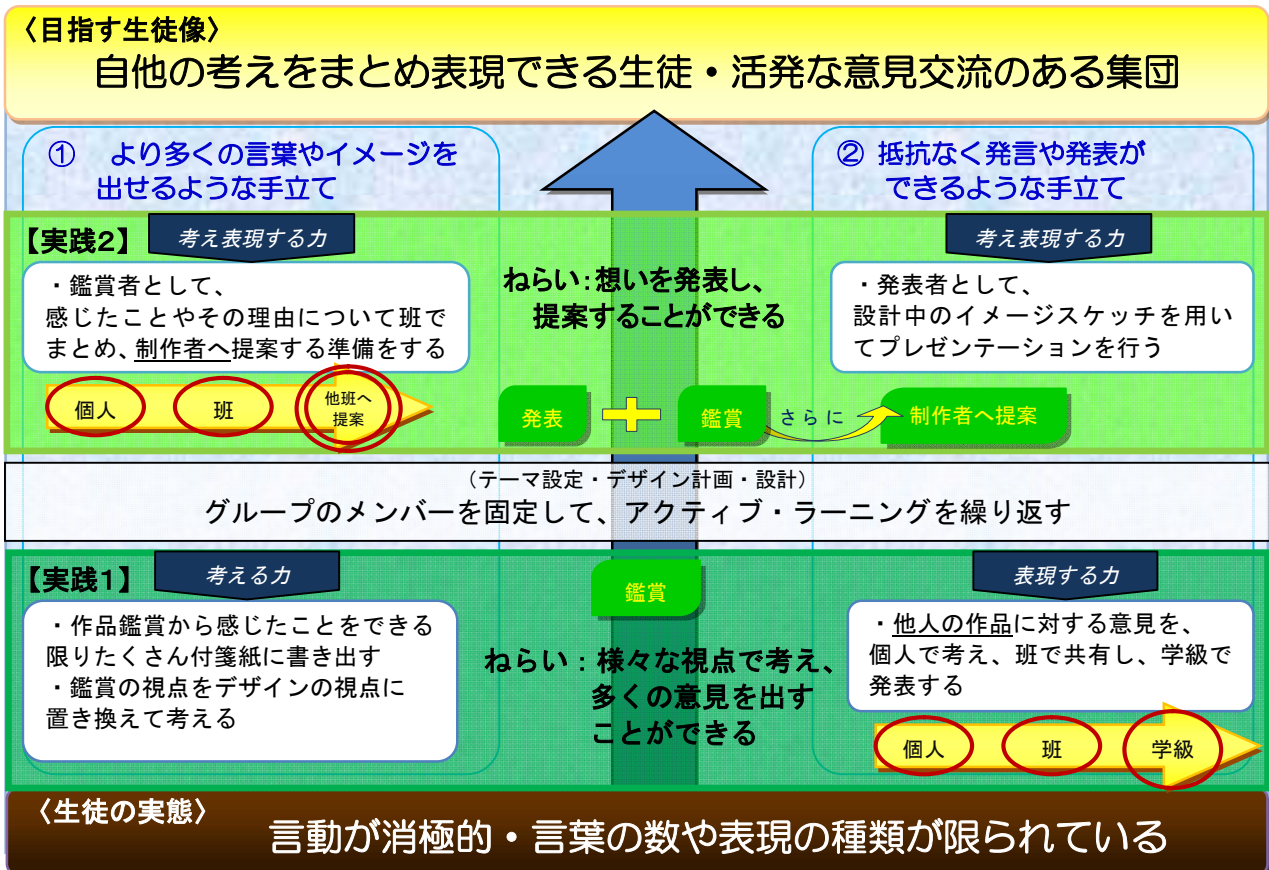
中央教育審議会（2012年8月）質的転換答申では、「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力をもった人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。（中略）学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。」としている。

本コースでは、造園に関する知識・技術の習得と並行して、様々な造園空間のデザイン設計から施工までを系統的に学んでいる。班で話し合っ進めるそのような場には活発な意見交流が期待されるが、対象生徒は、真面目に取り組むものの言動は消極的である。また、感想などの記述内容が単一であり、発言数だけでなく記述する際の言葉の数や表現の種類が少ない生徒が多い。

以上のことから、アクティブ・ラーニング型の言語活動を充実させた授業展開の中で、自分が感じたことや考えたことを言葉として表現する能力や態度をもった生徒の育成、そして、自他の考えをまとめ積極的に意見交流できる集団の育成への取り組みが必要と考えた。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

鑑賞から感じたことや印象的なことについて、付箋紙を用いたグループ活動により自他の考えをまとめ共有し発表を行う。気軽に自らの意見を言いやすくする工夫として、付箋紙を用いて口に出すのではなく書くことで、抵抗なくたくさんの意見を出せるようにした。

【実践1における研究上の手立て】

- コンテスト作品鑑賞において、感じたことを付箋紙を用いたグループ活動により自他の考えをまとめ共有し、発想を広げ発表する。〈表現する力〉
 - ・個々に、感じたことをできる限りたくさん付箋紙に書き出す。
 - ・3～4人グループで、記入した付箋紙を視点別に大判用紙にまとめる。そのような意見が出た理由についてもグループで共有し、最後に各グループの代表者が学級全体に発表する。
- 完成した作品の鑑賞からデザインの創造過程を考えるとという逆の過程で、デザインする際の手がかりをつかむ。〈考える力〉
 - ・大判用紙にまとめた視点が、デザインする際の視点として置き換えられることを知る。
 - ・デザインの創造過程にはイメージ・モチーフ・アイデアが相互に関係しながらできあがっていくことを知る。

【アクティブ・ラーニングの繰り返し】

班毎での小庭園制作に向けて、大テーマをもとに班別のテーマ設定およびデザイン計画・設計を行う際、グループのメンバーを固定して、付箋紙およびマインドマップを活用したアクティブ・ラーニングを繰り返し行った。

【実践2における研究上の手立て】

- 他者の作品鑑賞において、付箋紙を用いて言葉を引き出し班で共有し、他班に提案する。
- 発表者は、前時までに班毎に相談し準備しておいた「テーマの理解、モチーフやイメージ、構成手法などの工夫した点、見てもらいたい点など」について、書画カメラでイメージスケッチを映し出し、プレゼンテーションを行う。〈考え表現する力〉
- 鑑賞者は、プレゼンテーションを受け、個々に観賞から感じたことを付箋紙に書き出し、班でまとめ、制作者への提案シートをつくる。〈考え表現する力〉

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 個人活動後のグループ活動により、全員が自分の付箋紙を手に持ち向き合うことで、発言が苦手な生徒の意見も必然的に話し合いに組み込まれるかたちとなり、全員での意見交流が実現した。
- 活動規模を個人・班・学級と段階を追うことや、活動内容を意見する抵抗の少ない他人の作品から、制作者本人への提案という形にレベルアップしていくことで抵抗なく自らの意見を言葉と絵で表現できる生徒が多くなった。また、テーマ並びに設計意図をもち制作にあたる姿が見られるようになった。

2 課題

- 消極的な生徒にとっては、安心して発言できる環境作りやルール設定および個別の声かけの影響が大きいと考えられ、実態把握やルール設定、環境づくりなど教師側の事前準備が重要となる。

3 提言

- グループのメンバーを固定して様々なアクティブ・ラーニングを繰り返し行うことで、本実践をより効果的なものとし定着させることができたと考えられる。

＜授業実践＞

実践 1

1 単元名 「造園デザインの進め方」 (環境土木科第2学年・1学期)

2 本単元及び本時について

本題材は、造園デザインが、イメージ・モチーフ・アイディアを相互に関連させた作品であることを知り、造園デザインの創造過程を理解すると同時に、造園作品の鑑賞の視点を知り、その後自分たちがデザインする際の手がかりとするための活動である。本時は、あるコンテストガーデンの鑑賞を行い、個々に感じたことや印象的なことについて、付箋紙を用いたグループ活動により自他の考えをまとめ共有し、発表を行う。そのなかで、様々な視点や解釈があることを知り、付箋紙の活用と正解不正解はないということ、質より量を重視するという鑑賞方法から、意見を書き出すことへの抵抗を減らし、言葉やイメージを一人一人が多く出すという体験をさせることがねらいである。

3 授業の実際

【活動前】 ルールの確認

今後取り組むショーガーデンのデザイン・施工計画を確認し、長期的な見通しをつかませた上で、制作者の視点をもって、鑑賞やグループ学習に臨めるよう見通しをもたせる言葉がけを行った。

活動を行う前に、付箋紙記入のルール及び鑑賞のルールを口頭で説明した。

【展開1】 個人で鑑賞

[手立て] 個々に、スライドによる作品鑑賞から感じたことをできる限りたくさん付箋紙に書き出す。

鑑賞の視点を、①「目に留まったもの・特徴的なもの」、②「印象や雰囲気・連想される言葉」の2つに分けて、個人用ワークシートで整理しながら付箋紙に記入させた(図1)。

個人活動中の戸惑う生徒とのやりとりの様子

S1: これはどちらに貼ったらいいのだろう…

T: 今は真ん中に貼っておいて、班で考えてみよう。5枚ずつは書いてみよう。

S2: … (意見を書けず黙って手元の作品の写真を見ている生徒)

T: どのあたりに目が留まったのかな?

S2: (作品写真の特定箇所を指差して教師に答える生徒(次頁図2))

T: その部分のどんなところが気になったのかな? 色? かたち? なに?

S2: ん〜。黄色や赤の道が…。

T: では、付箋紙にそう書いて左の枠に貼っておこう。ほかには?

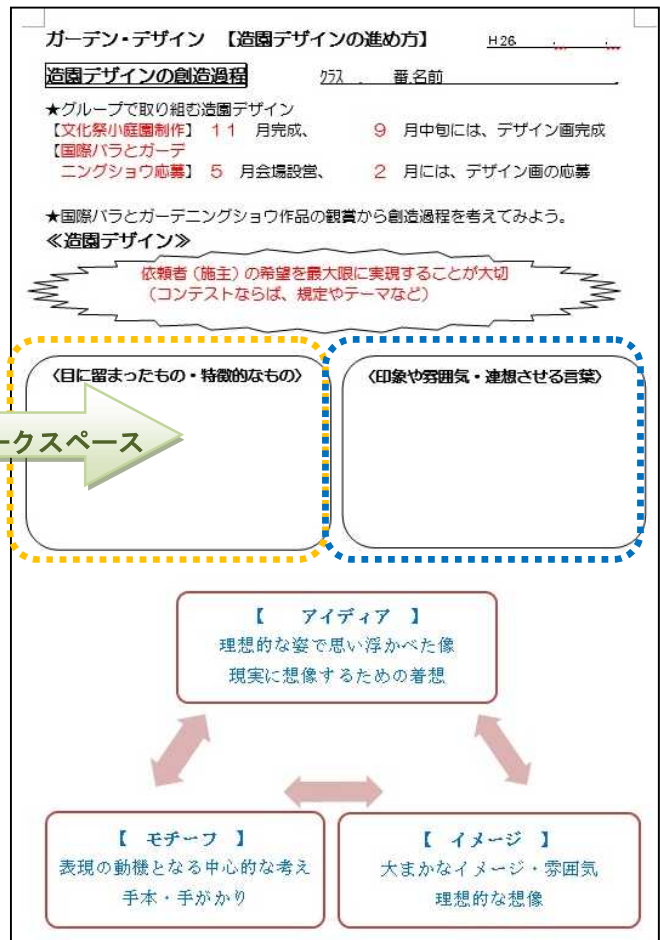


図1 個人用ワークシート

【鑑賞のルール】

- ・自分の観点・人それぞれの好みでよい
- ・作者の想いはあるとしても、正解があるわけではない
- ・質より量を書けた方がよい。深く考えずに好き勝手に書いてよい
- ・出た意見を批判してはいけないが、同意しなくてもよい

鑑賞のルールについて、全体に対してだけでなく個々に対して、活動中繰り返し声をかけて確認することで、考え込んで筆が止まっていた生徒の活動を促すことできた。



図2 筆が進まず質問に対し指で差し答える様子



図3 付箋紙を活用して意見を出し合う様子

【展開2】グループ活動と学級全体で共有

[手立て] 個人で記入した付箋紙を、視点別に色分けされた大判用紙に3～4人グループでまとめる。似た意見を整理するほか、そのような意見が出た理由まで発表できるように時間を区切りグループで話し合いを行う(図3)。その後、視点毎に各グループの代表者が発表し、学級全体で共有する。

グループ活動中の生徒同士の様子

S1: (「森っぽい」と書かれた付箋紙を指しながら) これって、どの部分のこと? 僕のこれと同じかな?

S2: (写真の一部分を指しながら) このあたりが、木が生い茂っていて森っぽかったから

S3: (「派手だけと落ち着いている」と書かれた付箋紙を指しながら) これも、その木がたくさんあるから書いたよ。

S2: (「派手な色」「カラフル」を指しながら) こういったものを書いている人も多いね。

目に留まったモチーフは同じでも、受けた印象や感じ方は人によって異なるということやその多様さを、感じとることができたようだった。様々な意見が出たことで、一つの事柄を深く話し合うというよりは、上記のように一つの意見から派生して話が広がっていく様子も見られた。また、顕著だったのは、付箋紙や写真を指差しながら、具体的な言葉よりは「このへん・これ・ここ」などと指示詞により意見交流している様子が多く見られた。

【展開3】鑑賞とデザインの視点の置き換え

鑑賞作品の作者の意図を紹介し、今回グループ活動で共有しまとめた内容と関連付けて、イメージとモチーフの考え方について説明し、デザインの創造過程は、イメージ・モチーフ・アイデアが相互に関連し、出来あがっていくものであることをワークシートにまとめさせた。大判用紙にまとめた2つの視点が、デザインする際の視点として置き換えられることを知る。

4 考察

- 個人活動後のグループ活動により、全員が自分の付箋紙を手に持ち向き合うことで、発言することが苦手な生徒の意見も必然的に話し合いに組み込まれるかたちとなり、全員での意見交流が実現した。
- ワークシートに直接書き込むのとは異なり、間違えたら捨てればいいという付箋の気軽さや、短い言葉で書くことができるため、これまでの発問への解答やノート等への記述に比べ多くの意見が出た。
- 活動前に時間の提示をしたが、想定よりも意見が出るのに時間を要し進行が滞った。時間を細かく区切りスピーディに意見を出す練習を繰り返し行うことで、より活発な意見交流につながると考える。
- 知識・理解的な内容の目標も設定しており、そのための導入と展開3に時間を要してしましたが、意見交流に活動の重点を置き、意見交流を深めたり広げたりするような手立てを追加する必要がある。

実践 2

1 単元名 庭園の計画・設計 「小庭園制作」 (環境土木科第2学年・2学期)

2 本単元(題材)及び本時について

本題材は、これまで造園デザインに関する理論学習やコンテストガーデンの鑑賞学習を重ねてきて、はじめて実際に計画・設計に取り組む小庭園制作に向けての計画段階では終盤の活動である。作品は、校内芝生広場に常設展示し、文化祭や校内イベント等で FK ガーディングショーとして来場者に対して生徒が作品説明を行う計画である。

本時は、施工直前の中間発表会にあたり、生徒は、小庭園制作者として発表者の立場と、他班の作品に対する鑑賞者として提案する2つの立場で取り組むこととなる。制作者として、設計中のイメージスケッチを用いて造園作品のプレゼンテーションを班毎に行い、鑑賞者は、作品を見て感じたことを班でまとめて発表者に提案する準備を行う活動である。

3 授業の実際

【活動前】 ルールの確認

本時の目標・流れを説明し、ワークシートにより班毎のイメージスケッチ鑑賞を行う際の視点及び立場の確認、聞く態度、発表する態度について全体で再確認した(図4)。

【展開1】 個人でスケッチ鑑賞

個々に、説明なしで他班のイメージスケッチを鑑賞し、自由に感じたことを黄色付箋紙に書き出させた。各視点で考えられるよう、自分のワークシートで整理しながら記入させた。

【展開2】 発表および個人で鑑賞

[手立て]

- 発表者(制作者)は、前時までに班毎に相談し準備しておいた「テーマの理解、モチーフやイメージ、構成手法などの工夫した点、見てもらいたい点など」について、書画カメラでイメージスケッチを映し出し、プレゼンテーションを行う(次頁図5-6)。
- 鑑賞者(提案者)は、プレゼンテーションを受け、個々に、観賞から感じたことを緑色付箋紙に書き出す。また、他者の発表から取り入れたい点があれば付箋紙に書き出す。

鑑賞者として提案する立場の確認事項

- ・制作者の意図と異なって伝わることもある。説明されても同意できなければ、それを伝えること。
- ・それぞれが感じたことを共有することが目的であり、自分の好みや感じ方を無責任に書いてよい。しかし、アドバイザーとして、注意し提案する責任がある。
- ・制作者は、提案された意見を鵜呑みにせず、そのような意見もあると捉え、提案を気に留めなくてもよいという前提であること。

【展開3】 グループ活動による他班に提案する準備

班毎に、付箋紙に書いた意見をアドバイスシートに理由と共にまとめ、他2班へ提案する準備をさせた(次頁図7)。

ガーデンデザイン 【小庭園制作中間発表会】 H26.10.27

★中間発表会の流れ

- ①イメージスケッチの鑑賞。感じたことを付せん紙に記入。〈個人活動〉
- ②班ごとに、プレゼンテーションを行い、鑑賞者は、感じたことを付せん紙に記入。〈個人活動〉
- ③付せん紙を班ごとにまとめ、制作者へ渡す準備をする。〈班活動〉
- ④ふりかえり。

★次回 〈班活動〉

自班の鑑賞シートを受け取り、他班の意見を今後の設計計画にいかそう。

鑑賞シート 例)「2013作品:あひるの家」

<p>〈イメージ・印象・雰囲気〉</p> <p>*「こどもらしい」</p> <p>⇒ 手形やヒモがこどもっぽく、</p> <p>〈ユニークな点・工夫を感じる点〉</p> <p>*「長靴の鉢」</p> <p>⇒ 身近な園芸物が違う用途で使われていておもしろい。</p> <p>〈疑問点・心配な点(質問)〉</p> <p>*小さなおもちゃが、なくなりそう</p>	<p>〈モチーフ・目に留まったもの〉</p> <p>*「カラフルな丸」</p> <p>⇒ 水溜りやアプローチのピー玉</p> <p>〈テーマとの関連性〉</p> <p>*「庭名と関連していない」</p> <p>⇒ あひるっぽさが全く感じられない。</p> <p>〈その他メッセージ〉</p> <p>*「あひる」らしさがあったと良い。</p>
---	--

★プレゼン・観賞を終えて・・・

*発表をしてみた感想。(伝えたいことは伝わりそうか)

事前の確認事

*他班のプレゼン聞き、鑑賞をした感想。
(自分たちの作品の参考にになりそうなアイデアがあったか、うまくアドバイスできそうか)

ふりかえりスペース

図4 個人用ワークシート

鑑賞者の個々の好みによって、良く感じる点と気になる点は違っており、話し合った上で「～という人もいるし～と感じた人もいた」というように、提案シートに記入していた班もあった。様々な視点や解釈があることを感じとれたはずだ。その後、ふりかえりとして、中間発表と鑑賞を終えての感想を個々にワークシートに記入させた。

ふりかえりシートへの生徒の記述

[発表をしてみて]

- 紙を見ずに言えるようにしたい。
- 絵だけで伝えるのは難しい。一つ一つ言葉で説明しなくては伝わらないので難しかった。
- 音色の表現とか、テーマに関わるところをもう少し説明した方がよかった。

[他班の鑑賞から]

- それぞれの考えや発想があつてとてもいいと思った。
- どの班も個性的で、独創的な作品もあつて、とても面白かった。

[提案シートをもらっての感想]

- 私たちが初めの頃にしようとした点を言われたが、別の所で表現することにしたのでこのままやりたい。
- 指摘のあった机の安定性を考え直したい。
- 植物が少ないと言われたので、改善したい。

事後アンケートには、「紙に文章で感じたことを書くのに比べて、付箋紙の方が言葉を書きやすかった」とほぼ全員が答え、「いきなり話し合うのと比べ、付箋紙に書いてから話し合った方がスムーズだった」と多くの生徒が感じとっていた。

4 考察

- 様々なアクティブ・ラーニングを繰り返し行う中で、抵抗なく自分が感じたことや考えたことを言葉として表現できる生徒が多くなった。そして、付箋紙に書く活動を繰り返しているうちに、発言しやすくなったことを自覚している生徒も半数以上にのぼった。
- 活動内容に応じて2～5分程度で、キッチンタイマーを用いて、班毎の発表時間・記入時間・話し合いの時間などを明確に区切って活動させた。少々焦っている様子も見受けられたが、時間内に何か書かなくてはという意識付けとなった。
- まずは個人で考え、少人数の班内で話し合い、学級全体の前での発表という具合に段階を追うことは、自分の意見または班の意見として、自信をもって発表することができるため、活発な意見交流には有効な手立てだといえる。
- 鑑賞および発表内容についても、意見する抵抗の少ない他人の作品に関する発表から、学級内の制作者本人に対して、まとめた内容をアドバイスシートとして渡すという具合に、心理的な言いにくさも徐々に慣れさせていくことができた。



図5 プレゼンテーションの様子

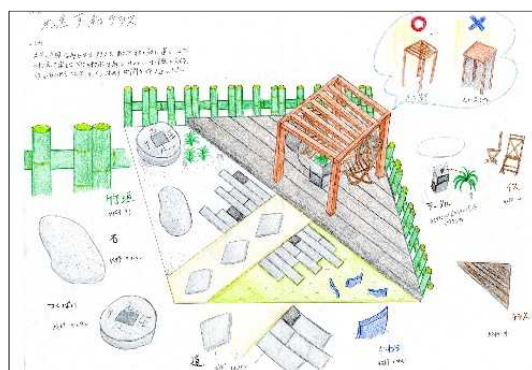


図6 発表用イメージスケッチ



図7 アドバイスシートにまとめる様子